JOURNAL GALLERY

毎号アーティストをピックアップしてご紹介します

「Documentation of Hysteresis -2011.1.9-」2011

Hyslom
ヒスロム

加藤至、星野文紀、吉田祐かららなるアーティストグループ。2009年より活動をはじめる。造成地の探険で得た人やモノとの遭遇体験や違和感を表現の根幹に置き、身体を用いて土地を体験的に知るための遊び「フィールドプレイ」を各地で実践し、映像や写真、パフォーマンス作品としてあらわす。またその記憶を、彫刻作品や舞台、映画へと展開させている。2016年度より宮城でのリサーチを開始しており、せんだいメディアテーク7階ラウンジにて2月21日(火)まで活動紹介展示を開催中。2018年度には成果展を開催予定。

art node

「優れたアーティストのユニークな視点と仕事」と、
地域の「人材、資源、課題」をつなぐ

せんだいメディアテークのコンセプトのひとつに「端末(ターミナル)ではなく節点(ノード)である」という言葉があります。そこからノードを抜き出し、再解釈し、「アートノード」を2016年からスタートしました。

現代アート作品にまつわる調査、企画、制作、発表までの過程を人々と共有し、活動にたずさわることのできる機会をつくること。そして、多くの人が関わり、熱のある「アートの現場」を仙台につくりだしていきます。

※「アートノード」は「せんだい・アート・ノード・プロジェクト」の略称です。

node | 結び(目)、こぶ、ふくれ/(劇などの)筋のもつれ、絡利/(組織などの)中心点/【植物、植物学】節(せつ)/茎の枝や葉の生じる所/【医学】結節/【天文】交点/【数学】結節点(曲線の交わる点)/【物理学】波節(振動体の静止点)/【言語学】節点/【語源】ラテン語「結び目」の意―出典:「新英和辞典 第6版」研究社(1994)

art node JOURNAL

アートノードの進捗を広く伝えるとともに、アートが東北の人・資源・課題と接続するための話題提供を行います。

アートノード ジャーナル 1号 2017年2月13日 発行
編集長|甲斐賀治(せんだいメディアテーク)
編集|渡邊曜平(せんだいメディアテーク) /長内綾子(communa) /高橋創一(communa)
アートディレクション・デザイン|homesickdesign
印刷|株式会社文展美術印刷
お問い合わせ・全国・発行
せんだいメディアテーク(公益財団法人 仙台市市民文化事業団)
〒980-0821 宮城県仙台市青葉区春日町2-1 / TEL:022-713-4483
E-mail: artnode@smt.city.sendai.jp / URL: http://www.smt.jp

artnode.smt.jp

せんだいメディアテーク sendai mediatheque 仙台市市民文化事業団設立30周年記念事業
© 2017 sendai mediatheque All Rights Reserved. 本紙記事・写真・イラストの無断転載を禁じます この用紙はリサイクルできます。

JOURNAL 1号

「アッペトッペ」ができるまで

こどもアートひろば 展覧会 KOSUGE1-16「アッペトッペ=オガル・カタカナシ記念公園」の試みと企み

仙台市地下鉄東西線の開通とともに誕生した荒井駅。その周辺は東日本大震災の際に津波が到達したエリアであり、地元の方や震災後に住み始めた方など、多様な住民が暮らしている場所です。今回、アーティストユニットKOSUGE1-16は、郷土研究家の天江富弥と童謡詩人スズキヘキをモチーフに、地域の方々や各地のアーティストと共同で二カ月の滞在制作をおこないました。展覧会の会場となったのは、荒井駅から東西線でつながっている国際センター駅です。その軌跡を、関係者の声とともに振り返ります。

撮影:酒井耕

6

いよいよ展覧会スタート!

初日から子どもたちが来て、カタカナの形をした遊具で遊び、青葉の風テラスが賑やかな空間に。

12月15~26日

1階では「おてんとさん」の活動を紹介する仙台文学館のパネル展示とハナカタマサキさんのアニメを上映。2階ではヘキのカタカナ詩「カゼ」の文字を一つひとつかたどった壁や遊具で構成されたひろば と、富弥とヘキの巨大こけしを展示した。

私は毎晩のようにヘキおんちゃん、天江のおんちゃんに会っていました。二人の労苦が展示に表れていたと思います。子どもたちが喜んで集まること自体が、二人の世界だと感じました/加藤峯さん(郷土酒亭 元祖炉ばた)

新感覚の楽しい催しでした。あの世から声がします。天江「ヘキよ、たまげたな。俺たちこけしになった」、ヘキ「んだ。世の中もだいぶ変わったもんだ」/鈴木楠吉さん(おてんとさんの会副会長・スズキヘキ長男)

[左]天江富弥 明治32(1899)年~昭和59(1984)年/本名 天江富蔵。仙台市生まれ。郷土研究家。ふるさとを愛し、ヘキをはじめ多くのひとびとと、みやぎの文化を育みました。"オンチャン"の名で親しまれ、童謡・こけし・絵・俳句などいろいろな分野でみんなの力になりました。

[右]スズキヘキ 明治32(1899)年~昭和48(1973)年/本名 鈴木栄吉。仙台市出身。詩人。子どもたちのために、詩を書いたり、童謡をきかせたりしました。はなし言葉の音を大切にするために詩や童謡にカタカナを使いました。「スズキヘキ童謡集」を残しています。

会場に設置された富弥とヘキこけし

今回はユニークなアート空間で、外国人ボランティアの方による言葉の響き や絵本の魅力を楽しんでいただきました/八巻優子さん(仙台国際センター交流コーナー)

会期中のイベント

「会服」と呼ばれるほど多くの「会」をつくり出した天江にちなんで、アーティストらとともに多種多様なイベントを開催しました。

1

2016年4~6月

2016年度アートノードのメインプログラムのアーティストに、仙台と関わりの深いKOSUGE1-16を招くことに。その土地ならではの歴史や人物をテーマとした彼らのシリーズ作品「The Playmakers」の仙台での制作を打診しました。6月にはKOSUGE1-16の土谷さんが1回目の来仙。地域メディア史研究家の渡邊慎也さんから「おてんとさん」を教えていただき、その流れで関わりが深い国分町「炉ばた」へ。天江富弥、スズキヘキについて伺い、ふたりの資料が展示されている仙台文学館も見学。

おてんとさん 大正時代の仙台で郷土研究家の天江富弥と童謡詩人のスズキヘキが生み出した全国初の童謡専門誌。

不思議タイトル
「アッペトッペ=オガル・カタカナシ記念公園」
ヘキが大切にした郷土のはなし言葉(仙台弁)と音の響きを活かしたタイトルです。アッペトッペ…仙台弁で「めちゃくちゃな」、オガル…仙台弁で「育つ」、カタカナシ…ヘキがとりくんだカタカナ詩。

2

8~10月

土谷さん、2回目の来仙。関係者へのヒアリング、ヘキにまつわる資料見学などをおこない、展示プランについて打ち合わせをしました。3回目の来仙時には、国際センター駅を訪れ、留学生のお国 がイベントを見学し、関係者や地元アーティストとの具体的な打ち合わせ、荒井駅前にあるもろやファームキッチンと制作場所の相談をおこないました。

天江富弥さんのことも知っていたので懐かしい気持ちになったの と、子どもたちが遊べる場があればいいかなと思い、制作場所として建物の1階をお貸ししました/宮場哲夫さん(もろやファームキッチン)

3

11月上旬

滞在制作スタート!

荒井での制作がスタートして一週間後、スズキヘキ長男の鈴木楠吉さんが現場を見学。土谷さんとは初めての顔合わせとなり、ヘキとの思い出の数々を伺いました。

4

11月16日

町内会・ちゃいるどらんどでのワークショップ

高知在住のミュージシャン・ハナカタマサキさんと、仙台の布物作家・イトウユウコさんが、ちゃいるどらんど荒井保育園と荒井東町内会(復興公営住宅)の集会場にてワークショップを開催し、展示の一部となる作品を制作しました。

ワークショップに参加して、「アララ々(超常結社)はこスズキヘキさんの名前を目にしていたことを思い出しました」/荒井東町内会の方

子どもたちも先生も一緒にワークショップを楽しみ、これからの活動のヒントや刺激をいただきました/ちゃいるどらんど荒井保育園の先生

5

12月上旬

制作もラストスパート

荒井の制作場所に加え、卸町のイベント倉庫「パトの家」でもイトウユウコさんが展示空間の床を飾るカーペットを制作。準備は佳境に。

6

12月15~26日

いよいよ展覧会スタート!

初日から子どもたちが来て、カタカナの形をした遊具で遊び、青葉の風テラスが賑やかな空間に。

1階では「おてんとさん」の活動を紹介する仙台文学館のパネル展示とハナカタマサキさんのアニメを上映。2階ではヘキのカタカナ詩「カゼ」の文字を一つひとつかたどった壁や遊具で構成されたひろば と、富弥とヘキの巨大こけしを展示した。

私は毎晩のようにヘキおんちゃん、天江のおんちゃんに会っていました。二人の労苦が展示に表れていたと思います。子どもたちが喜んで集まること自体が、二人の世界だと感じました/加藤峯さん(郷土酒亭 元祖炉ばた)

7

12月17日

「外国絵本のおはなし会」

仙台に暮らす外国の方々がそれぞれの言語で絵本や遊びを紹介する。「外国絵本のおはなし会」に子どもたちが多数参加。カタカナシ公園が国際色豊かになりました。

8

12月18日

「こけしぽっこのこけし劇」「ホヤちょうちんのお出迎え」

富弥とヘキのこけし(KOSUGE1-16制作)を使い、伊达を舞台にした新作劇「~こけしが語る宮城の民話~こけしぽっこのこけし劇」公演と、アーティスト・磯崎道佳さんのお出迎えを開催。地下鉄の風で揺らのホヤを模した風船をつくりました。

「こけしの天江富弥氏」しか知らなかった私たちは、今回「会服・天江のおんちゃん」とお神酒たちの足跡に初めて出会いました。時空を超え「炉ばた」で、おんちゃんたちの四方山話に耳を澄ませてみたくなりました/小島爽子さん(こけしぽっこ代表)

9

12月23日

「おがる影ワークショップ」「カタカナシ記念トーク」

美術家・タノタイガさんの木製影刻「おがる影」ワークショップに多くの方が参加。ギャラリートークでは、展示場所を巡りながら土谷さんが解説しました。

10

12月25日

「ハナカタマサキバンド」「プレジャーマーケット」

スズキヘキの曲をアレンジしたものと、留学生に聴かせてもらったキルギス、ラトビアの歌曲を演奏したハナカタマサキライブには、おてんとさんの会の方々がコーラスで飛び入り参加。国際センター駅を会場に毎月開催されているまちづくりイベント・プレジャーマーケットとコラボ、会場は大盛り上がり。仙台の児童文化の研究者・加藤理先生も来場。

大人も子どももともに楽しむ仙台の児童文化活動の原点を思い出させてくれました/加藤理さん(文教大学教育学部教授)

転換期にある「公園」の在り方の大きなヒントだと感じました/豊嶋純一さん(特定非営利活動法人都市デザインワークス・プレジャーマーケット主宰)

荒浜

ディオニュソス的アッペトッペ
土谷 享 KOSUGE1-16

「童話」や「児童文化」という言葉は天江富弥やスズキヘキが活動始めた大正時代に使われ始めた比較的あたらしい言葉だという事を知った。それ以来、しっかりとした定義が定まらずに個々の解釈によって説明されてきた言葉だ。ある時は"教育産業"の中で、ある時は"児童教育"の中で、ある時は"文化"の中で使われる。しかし、「童話」を介して出会ったヘキや富弥らはそんなことはよそ目に、「子供の為」という詩作では無く、独自の詩を追求し、その結果がたまたま「童話」と呼ばれたもの/呼んだ/だけだという印象を受ける。お金にするつもりは無く、教育に取り込まれるのは嫌いで、芸術家も嫌い。しかし、表現をする事、表現を分かち合う事は大好きで、童話専門雑誌の創刊、ストリートライブ、大規模な講演会、自然科学と芸術を取り入れた林間学校など、アーティスト・イニシアティブによって多種多様な企画や場を仕掛けてしまう。いわゆるカギカッコ付きの「芸術家」を嫌った彼らの方こそ「モダニスト」であり「芸術的」であったと思う。

従来の形式に捕われない彼らの活動からは学ぶものが多くある。彼らが創刊した日本最初の童謡専門雑誌「赤い鳥」の活動を紹介する仙台文学館のパネル展示とハナカタマサキさんのアニメを上映。2階ではヘキのカタカナ詩「カゼ」の文字をひとつひとつかたどった壁や遊具で構成されたひろば と、富弥とヘキの巨大こけしを展示した。

私は毎晩のようにヘキおんちゃん、天江のおんちゃんに会っていました。二人の労苦が展示に表れていたと思います。子どもたちが喜んで集まること自体が、二人の世界だと感じました/加藤峯さん(郷土酒亭 元祖炉ばた)

青野文昭(あおの・ふみあき)1968年仙台市生まれ、同地在住。在学中から「修復」という概念を作品に取り入れ、捨てられた物を収拾して、その欠損部分を修復することで彫刻作品を制作している。2017年9月より武蔵野市立吉祥寺美術館で個展開催予定。

「なおす・代用・合体・連鎖(震災後開上で収拾した細色の衣服から・人物の面影)2015」2015/収拾物、中古家具、アクリル系絵具、その他/250×230×100/撮影:小岩始

「こぶ」する一冊

テーマ

酒井朋子

東北学院大学 教員

現在の職に就くきっかけとなった一冊

笑い/不気味なもの
H・ベルクソン/S・フロイト
原著二訳/平凡社/2016

幼い頃から怖い話や怪物に惹かれた。人文書院『フロイト著作集 一』で「不気味なもの」を読んだ際の恐怖・違和感が、関心からだと、大きく見れば、いまの研究関心ともつながっている。ここではベルクソンの「笑い」とともに不気味さを考える訳本を勧ります。アイルランド紛争の調査の中でも、「不気味な笑い」によく出くわした。

読者の「こぶ」となるであろう一冊

プライベート・ゲイ・ライフ ポスト恋愛論
伏見憲明/学習書房/1991

自分を語ること。そして、俯瞰した中に位置付けること。それが次の一歩を踏み出すよすがとなる。三十才を目前にして、私が自らのセクシュアリティに向き合い、歩む道を一から見直すことになる端緒をつくった一冊だ。何が見えるか、その思いが自分の中に積み上がってゆく。取り替えられない自分が確かにある。怯まず進め。

オスカー・ワオの短く凄まじい人生
ジュノ・ディアス/都甲幸治・久保尚美訳/新潮社/2011

恋する者たちの欲望、劣等感、暴力を徹底して明るい言葉で描く青春小説。ドミニカ共和国生まれの作者にとってファンタジーSF、架空世界の用語とイメージを通じてなお故郷の三十年にわたる奇々怪々な独裁が描けなかったということにガツンとやられた。歴史を書くとは、いったいどういうことか。

酒井朋子(さかい・ともこ) 東北学院大学教員。専攻は人類学。主な著作に「紛争という日常―北アイルランドにおける記憶と語りの民族誌」(人文書院、2015年)。現在、チリの軍政期の日常を描くタペストリー「アルピジェラ」を中心に、紛争や災害にかかわる戯曲作品を展示する企画を準備中。仙台では2017年5月より展示を開催予定。

小浜耕治

東北HIVコミュニケーションズ

現在の職に就くきっかけとなった一冊

地べたの神 現代の〈低み〉からの福音
渡辺英俊/新教出版社/2005

抑圧されたひとびとに優しい眼差しを、と説く本ではない。社会が変わるには、抑圧される人々自身がまずは変わることが可欠なのだ。彼らの姿から、自分の不小さくされているものが見えてくる。これに向き合い自分が進む道を見いだすことができる。彼らが生きるように、私も生きてゆける。

読者の「こぶ」となるであろう一冊

小浜耕治(こはま・こうじ) 大学院在学中に仙台にできたゲイサークルの活動に参加。はどなく東北HIVコミュニケーションズ(THC)の立ち上げに加わり、研究生活を挟んでコミュニティワークの世界へ。震災後には、多様なセクシュアリティに関する活動に本格的に取り組み始める。2013年、プロテクスト教会で洗礼を受ける。クイアと聖的統合を目とする。

東北奇譚 | 01 | 青森 | 奥脇嵩大 青森県立美術館学芸員 青森は巨大な遺失物取扱所である。 東北奇譚

青森には「現在」しかない。

3年前青森市に居を移して以来、いつしかそう思うようになった。異論は即座に出るだろう。独特の歴史風土に基づいた「現在しかない」とは何事か、青森がルーツとして大事にしている「縄文」は、何千年も前の遠古の文化ではなかったか。確かに青森には縄文人の痕跡の数々が残る。ただ少し掘れば見つけることができるそれらは少し身近過ぎるように思え、そしていまこの時に価値付けられるという点では、縄文は過去よりも現在に属すとしないだろうか。独自の歴史風土を強みとする青森を斜めに切り取ると、この土地の過去が現在的な価値観のもとで発見されたものであり、その意味では青森には「現在」しかない、という見方もまた可能なように思う。

ところで青森はいま、空前の美術館建設ラッシュを迎えている。八戸市では設計者を公募し、弘前市では「吉野町煉瓦倉庫」を中心に美術館を核とした改修計画が進む。それぞれが2020年の開館に向けて動いているいま、素朴に思いを馳せてみたいのが「美術館のある風景」についてである。かつて寺山修司は美術館を「巨大な遺失物取扱所」と言ったまっていた。だから、何を忘れるか/だけが問われるということになる」と言った。現在しかない青森で次々と「遺失物取容所」たる美術館をつくられることっ。寺山の言葉を借りればいま、青森は忘却から自分たちの未来を捉える最中なのかもしれない。

忘却が遺失物取容所/の役割が求められるその問題のつなぐ「遺失物取扱所」の役割が求められる。そして記憶と現実を作用させ、人と自然の多様な生を想像させる風景をひらく場所であること。ひらかれるべき風景のエントとして以下の問き取りを挙げ、本稿を終えたい。

俺が仕事帰りに梵珠山※通ったらパーっとね、山が黄金色に光ってねえ、夕焼けとかじゃないよ、ほんとに山が光ってるんだ。そのとき仏様がいるなーって思ったよ。

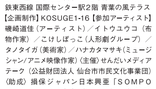
※青森市・浪岡町境の山。古くから教団の信仰を集めて、付近の山々は五穀の豊作と月見に適好明/(おとの・ふくき、陸奥伝承がある。

奥脇嵩大(おくわき・たかひろ)「企画したさな展覧会」「光の回廊展」2015-16 京都アートホテルクリスタル、「青森ロコ2016 模と路」(青森県美術館)等。現在、廣美保介ランドスケープデザイン・ヒスロム(アーティストユニット)による青森の風景への「調査」と「介入」を行うプロジェクト「青森ロコ」のアートディレクションを担当。青森県美術館内、風景・成果発表展示を準備中。(会期:3月11日~25日、青森県立美術館内)。

こどもアートひろば 展覧会
アッペトッペ=オガル・カタカナシ記念公園

2016年12月15日(木)~26日(月)/仙台市地下鉄東西線 国際センター駅2階 青葉の風テラス【企画制作】KOSUGE1-16【参加アーティスト】磯崎道佳(アーティスト)/イトウユウコ(布物作家)/こけしぽっこ(人形劇グループ)/タノタイガ(美術家)/ハナカタマサキ(ミュージシャン/アニメ映像作家)(主催)せんだいメディアテーク(公益財団法人 仙台市市民文化事業団)(協賛)麻保ジャパン日本興亜「SOMPOアート・ファンド」(企業メセナ協議会 2021 Arts Fund)

こけしぽっこ(こけしぽっこのこけしげき)
2001年に東田智志(くるまだ・ちしの)、土谷享(つちや・たかし)のアーティストユニットとして活動開始。あいちトリエンナーレ2010、2010年「こどものにわ」(東京都現代美術館)など、出展多数。せんだいメディアテークでは2006年に体験型アートイベント「青葉緑日」へ参加しました。2008年「ART仙台場所」での「どんどこ!巨大紙相撲」が、現在も市内各地で行われている。
kosuge1-16.com



KOSUGE1-16(こすげいちのじゅうろく)
2001年に東田智志(くるまだ・ちしの)、土谷享(つちや・たかし)のアーティストユニットとして活動開始。あいちトリエンナーレ2010、2010年「こどものにわ」(東京都現代美術館)など、出展多数。せんだいメディアテークでは2006年に体験型アートイベント「青葉緑日」へ参加しました。2008年「ART仙台場所」での「どんどこ!巨大紙相撲」が、現在も市内各地で行われている。
kosuge1-16.com

art node TALK

アートや文化の今を聞く

2017年2月25日(土) 16:00-19:30
開場15:30(ホーメイ実演あり・休憩含む)
トーク・パフォーマンス:山川冬樹(現代美術家/ホーメイ歌手)
聞き手:千石英世(アメリカ文学者/文芸評論家)
【会場】Gallery TURNAROUND(青葉区大手町6-22久光ビル1F) TEL 022-398-6413 / http://turn-around.jp/
【参加】1,000円(定員35名、要事前申し込み)
【申込】info@turn-around.jp まで

現代美術家でホーメイ歌手の山川冬樹さんは、自らの声・身体を媒体に視覚、聴覚、皮膚感覚に訴えかける表現で、音楽/現代美術/舞台芸術の境界を越えて国際的に活動されています。「空間」とは「身体」が外側に折り返されたものであり、「身体」とは「空間」が内側に折り返されたものである……この「空間」と「身体」をめぐる感覚が、さまざまな形に広がって表現に結びついていると山川さんはおっしゃいます。仙台で初となる今回のTALKではパフォーマンスの上演に加えて、自らのルーツにあたる旧作から最新作のテーマとなっている病と隔離の問題まで、ご自身の作品解説を軸にしながら、世界と身体との創造的な関わりについてお話しいただきます。聞き手にはTURNAROUNDとつながりが深い文芸評論家の千石英世さんをお招きします。

art node MEETING

自由参加型公開会議

アートノード・ミーティング02
KOSUGE1-16と「アッペトッペ」を振り返る
2017年2月19日(日) 16:00-18:00
【会場】せんだいメディアテーク7階スタジオa
【参加】無料・申込不要・直接会場へ
【出演】土谷享(アーティストユニットKOSUGE1-16)・甲斐賀治(せんだいメディアテーク アーティスティック・ディレクター)

「アートノード・ミーティング」は、アートノードにまつわるあれこれを公開し、より多くの意見や視点を得て、その意義をみなさんとともに深めていくイベントです。第2回は、アートノードが昨年展開したプロジェクト「アッペトッペ=オガル・カタカナシ記念公園」(企画制作:KOSUGE1-16)を軸に、4月からの流れを振り返ります。また、アートノードに進めていてのほかのプロジェクトについても現状報告します。

※ディオニュソス的…「彫動」ニーチェが「悲劇の誕生」で説いた芸術衝動のこと。陶酔的、創造的、激情的なものと対立する。8ページ参照。
―出典:「デジタル大辞泉」(小学館)より

門雄話 「おてんとさん」は東京を介在させずにインターローカルなネットワークを促進させた。スズキヘキは「原始童謡論」や「カタカナシ」により方言と音を大切にし、郷土研究家にもいわれる富弥は、東北各地に伝承されていた文化をユーモラスに再解釈し実践した。日本全国が標準化され始めた時代の中に居ながら、地域の価値に目を向け、新たな実践につなげた。およそ100年経つ現在においても、彼らの提起は有効である。

今回のプロジェクトでは当時の活動から幾つかを引用し、なぞらえたイベントを企画した。急ぎすぎたグローバルスタンダードの反動が世界中で吹き荒れる現在において、彼らの振る舞いから学ぶものは多い。地方の中のニッチと丁寧に対峙する事で、場がつくられ、仲間がつくられ、ネットワークがつくられていったのだろう。これはカタカナシ記念公園での多くの出会いから実感した事であり、その為のstudyだったと位置付けられるのではないか。そして12月26日に会期を終えて、この展覧会を開催した事が新たな出発点だった事に気付けた。今回の沢山の出会いが、枝葉の様に仙台の大空から再びインターローカルに広がって行く事を今後に期待待したい。